

「 Kommunismus という幽霊」の現在：
ドゥルーズ＝ガタリによる「幽霊」史とその彼方

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学経済学会 公開日: 2019-10-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣瀬, 純 メールアドレス: 所属: 龍谷大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20191029-007

「 Kommunismus という幽霊」の現在 —— ドゥルーズ＝ガタリによる「幽霊」史とその彼方

廣 瀬 純

0. 「マルクス主義者」としてのドゥルーズ＝ガタリ

私は昨年末、佐藤嘉幸と共著で、『三つの革命——ドゥルーズ＝ガタリ政治哲学』（講談社メチエ選書）という本を発表しました。ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリは、どちらも 1960 年代に本格的に著述活動を開始したフランス人哲学者で、彼らには幾つかの共著があります。『三つの革命』では、彼らの共著のうち、主要な仕事と看做し得る 3 冊、72 年の『アンチ・オイディプス』、80 年の『千のプラトー』、91 年の『哲学とは何か』を論じました。

ドゥルーズは、『哲学とは何か』刊行直前に行われたインタビューで、自分もガタリもつねに「マルクス主義者」であり続けてきたとし、その理由を次のように述べています。「私たちは、資本主義及びその発展の分析を軸としないような政治哲学はいっさいあり得ないと考えています。マルクスにおいて私たちの関心を最も惹くのは、彼が資本主義をひとつの内在的体系として分析している点です。資本主義は、おのれ自身の限界をつねに押しやり、おのれ自身の限界をつねにいっそう拡大された規模で見出す。限界は資本自身に他ならないからです¹⁾」。ここでドゥルーズは 4 つのことを言っています。第一に、ガタリとの共著は「政治哲学」である。第二に、自分たちの政治哲学は「資本主義及びその発展の分析を軸とする」ものである。第三に、自分たちの行ってきた資本主義分析は、資本主義を「内在的体系」だとしたマルクスに依拠するものである。第四に、内在的体系としての資本主義のその「発展」は、それ自体では、外的な限界にけっして達することなく、内的な限界のそのつねなる拡大として進行し続ける。

1) Gilles Deleuze, « Contrôle et devenir » (1990), entretien avec Toni Negri, *Pourparlers 1972–1990*, Minuit, 1990. この発言は『資本論』の以下の一節を踏まえたものである。「資本主義的生産は、おのれに内在するこれらの限界を乗り越える傾向につねにあるが、そうした乗り越えが達成されるのは、同様の障壁を新たに、そして、よりいっそう大きな規模で資本主義的生産の前に打ち立てるような手段を用いてのみのことである。資本主義的生産の真の障壁は資本それ自身なのである」(Marx, *Le Capital*, Livre III, Section III, chapitre XV, 2 [Pléiade, II, p. 1032])。

私の発表では、佐藤との共著の大枠に沿ってドゥルーズ＝ガタリの「マルクス主義」を紹介し、後のディスカッションで、それを、他の発表者たちの議論と突き合わせてみたいと考えています。

1. 「コミュニズムという幽霊」：資本主義の外的かつ絶対的限界

今回の発表タイトルは「“コミュニズムという幽霊”の現在」としました。今日「幽霊」が出現するとしたら、それはどこにおいてのことなのか。そのようなことを皆さんと一緒に考えてみたいとの思いから選んだタイトルです。ドゥルーズ＝ガタリがマルクス＝エンゲルスのこの有名な表現を引くことは一度もありませんでしたが、しかし、ほぼ10年おきに刊行された『アンチ・オイディプス』、『千のプラトー』、『哲学とは何か』のそのすべてにおいて彼らが「政治哲学」として行ったのは、やはり、70年代初頭、80年代初頭、90年代初頭のそれぞれの時期にあって、同時代の資本主義の発展状況を分析し、それに基づいて、「幽霊」が出現し得る場を同定することだったと言っていると思います。そうした場として実際に同定されたのは、『アンチ・オイディプス』ではプロレタリアによる階級闘争、『千のプラトー』ではマイノリティによる承認闘争、『哲学とは何か』では、たんなる「犠牲者」に転じたマイノリティを前にしてマジョリティが展開する人道主義あるいは人権論でした。

ドゥルーズ＝ガタリにとって「コミュニズムという幽霊」とは何か。実のところ、彼らの共著では「コミュニズム」という語すら一度も使われることはありません。彼らの問題は、彼ら自身の言葉遣いで言えば、内的かつ相対的な限界のつねなる拡大として発展する資本主義に、どうしたら「外的かつ絶対的な限界」を突き付けられるかというものです。ドゥルーズ＝ガタリは、彼らの最初の共著『アンチ・オイディプス』で次のように書いています。「資本主義社会は、数多の利害の表出に耐えるが、欲望の表出にはいっさい耐えられない。資本主義社会の下部諸構造を吹き飛ばすには欲望の表出があれば十分なのだ²⁾」。利害の表出は、それがどんなに革命的なものであっても、すなわち、それがどんなに甚大な危機を資本主義に突き付けようとも、資本主義の歯車を吹き飛ばすようなものにはならない、つまり、それによってもたらされる危機を、資本主義は、おのれ自身の内的限界として処理し、そうした内的限界の拡大によって乗り越えることができる。ドゥルーズ＝ガタリは、内在的体系としての資本主義を「公理系」と呼んでもいますが、新たな利害の表出に対しては、資本主義は、新たな「公理」を追加することで、それをおのれの内部で処理してしまう。要するに、どんな利害の表出も「資本の平面」上にとどまる現象でしかないということです。これに対して、欲望の表出は、それがどんなに些細なものであっても、資本主義の働きをたちまち狂わせるものになる。利害に従わない欲望、

2) Gilles Deleuze et Félix Guattari, *L'Anti-Édipe: Capitalisme et schizophrénie, t. 1*, Minuit, 1972/1973, p. 455.

利害に反する欲望こそが、資本主義にとって、外的かつ絶対的な限界をなすということです。

ドゥルーズ＝ガタリは、無論、欲望の表出が局所的になされればそれでよいとは考えていません。局所的に表出した欲望が、そのまま、社会野全体に浸透しなければならない、万人を巻き込むものとならなければならないと、彼らは考えている。しかし同時にまた、彼らは、社会野全体に欲望を浸透させる力を有する集団が、具体的に「どこに」出現するの^スかという問題にも関心を持っている。「幽霊」はどこに出現するの^スか。この点について『アンチ・オイディプス』では次のように言われます。「革命の帰趨が、搾取され支配されている大衆の利害だけに結び付いているということは明白極まりない。[…]革命的ポテンシャルは前意識的因果状態のなかに含まれたものとしてあるが、その現勢化は、そうした前意識的因果状態によってというよりも、むしろ、[…]欲望をその唯一の原因とする^ス分裂によってこそ、説明され得る³⁾」。

「前意識的因果状態」とは、搾取され支配されている大衆の利害が表出され、それを原因として新たな社会体^{ソシエテ}の創出が導かれつつあるような状態のことです。ドゥルーズ＝ガタリは、「利害」については、マルクス＝レーニン主義の伝統通り、搾取され支配される大衆の客観的な利害を「前意識的なもの」だとした上で、それを「意識」として体现するのが党あるいは前衛であるとし、反対に、欲望については「無意識的なもの」だとしています。要するに、彼らがここで言っているのは、全社会野に欲望を浸透させる力を有する集団、「革命的ポテンシャル」を有する集団は、搾取され支配されている大衆の利害が表出される場においてこそ出現し得るということであり、そうした場が、『アンチ・オイディプス』ではプロレタリア階級闘争、『千のプラトー』ではマイノリティ承認闘争、『哲学とは何か』では人道主義あるいは人権論にそれぞれ同定されるのです。

以下、『アンチ・オイディプス』から『千のプラトー』を経て『哲学とは何か』へと至るドゥルーズ＝ガタリの約 20 年間の議論展開を概観したいと思います。

2. 『アンチ・オイディプス』(1972)：プロレタリア、階級闘争、階級外性への生成変化

『アンチ・オイディプス』は「68 年 5 月の書」とであるとよく言われますが、同書に 68 年を論じた箇所はひとつもありません。同書で論じられるのは、プロレタリアによる利害闘争としての階級闘争です。それでもなお、『アンチ・オイディプス』に 68 年的な何かがあるとすれば、それは、利害闘争を欲望の観点から分析するという点においてのことだと言えます。時間の都合上、説明は控えますが、ドゥルーズ＝ガタリに「欲望」への着目を促したのは 68 年の経験

3) Id., *ibid.*, p. 452–453.

でした。利害闘争を欲望の観点から分析するとは、最も簡潔に言えば、利害闘争に、利害への欲望の従属を見出すことであり、また、この従属関係のその反転可能性を探るということです。利害への欲望の従属を反転させ、欲望をそれとして表出させる実践を、ドゥルーズ＝ガタリは「分裂分析」^{スキゾアナリズ}と呼んでいます。

『アンチ・オイディプス』において「搾取され支配されている大衆」として同定されているのはプロレタリアです。「幽霊」が出現し得る場として同定されているのはプロレタリアの階級闘争、すなわち、自らを「階級」として構成することで、ブルジョワ社会としての資本主義社会を二極化するプロレタリアによる闘争であり、そうした闘争をドゥルーズ＝ガタリは、ロシア革命を念頭におき、「レーニンの切断」と呼んでもいます。ドゥルーズ＝ガタリが重視するのは、しかし、そうしたレーニンの切断において、プロレタリアが、まさに「革命の帰趨」を左右する問題あるいは壁に直面することになるという点です。『アンチ・オイディプス』には次のようにあります。「一方では、プロレタリア階級が彼らの客観的利害に応じた勝利を収める。しかし、そこでの戦いは、あくまでも、彼らの意識としてある前衛党のその支配の下で、すなわち、「大いなる不在」としてのブルジョワ階級のその等価物と言ってよい官僚たちを利用する仕方で行われる。他方では、ブルジョワ階級が国家の統制を維持する。こちらでは、ブルジョワ階級は彼ら固有の技術家官僚体制を産み出し、また、プロレタリア階級を第二階級として承認し統合するための幾つかの新たな公理を追加する⁴⁾」。レーニンの切断は、それ自体、資本主義による切断を免れ得ない。レーニンの切断の資本主義的切断は、社会主義国では国家独占資本主義の確立として、その他の国では社民主義的改革として実現される。このダブル・バインド、この壁にプロレタリアは彼らの闘争のなかで必然的に直面すると、ドゥルーズ＝ガタリは考えているのです。

資本主義による「切断の切断」に直面してプロレタリアは分裂分析の実践に入る。そして、それを通じてプロレタリアは、資本主義によるものとは異なる「切断の切断」へと向かうことになる。レーニンの切断に対してプロレタリア自身のなすこの「切断の切断」こそ、ドゥルーズ＝ガタリが「欲望をその唯一の原因とする分裂」^{スキーズ}と呼んでいるものです。このとき、「階級」としてすでに集団をなしているプロレタリアは、そっくりそのまま、「階級」とは異なる新たなタイプの集団に転じることになる。ドゥルーズ＝ガタリは、サルトルを参照して、「階級」の場合のように、利害に欲望に従属させることで形成される集団を「服従集団」、この従属を反転させる集団を「主体集団」と呼び、次のように論じています。「前意識の観点からは「革命的」と見なし得る集団でも服従集団にとどまる。権力を勝ち取った集団であっても、その権力が、欲望的生産に従属させ押し潰し続ける力能形態をとる限り、服従集団にとどまるのだ。〔…〕主体集団とは、反対に、リビドー備給それ自体が革命的なものとなっている集団のこと

4) Id., *ibid.*, p. 304.

である。主体集団は欲望を社会野に浸透させ、社会体や力能形態^{ソシウズ}を欲望的生産に従属させる。〔…〕服従集団としてすでに出現している革命的集団は、しかし、然るべき条件下では、主体集団の役割を引き受けるものに転じ得る⁵⁾」。

服従集団には革命的集団と反動的集団とがあるとドゥルーズ＝ガタリは考えています。新たな利害を表出させ、資本主義を危機に晒すのが革命的な服従集団ですが、この革命的服従集団は、おのれの生じさせる危機が、資本主義にとって同化可能なものでしかないという現実^{ソシウズ}に直面した瞬間から、主体集団へと転じる可能性に開かれる。『アンチ・オイディプス』の時点でのドゥルーズ＝ガタリがプロレタリア階級闘争に「幽霊」すなわち「革命的ポテンシャルティ」の出現を見ていたのは、当時の彼らにとって、プロレタリア階級こそが、まさに、そのような革命的服従集団だったからです。

プロレタリア階級が主体集団に転じた場合、それが社会野に浸透させる欲望は、具体的には、どのようなものか。『アンチ・オイディプス』には次のような議論があります。「理論上の対立は2つの階級のあいだにあるのではない。〔…〕階級と階級外の者たちとのあいだにある。機械に従う者たちと、機械それ自体またはそのすべての歯車を吹き飛ばす者たちとのあいだにある。内的かつ相対的な限界と外的かつ絶対的な限界とのあいだにある⁶⁾」。資本主義公理系が絶対的な限界に晒され、そのすべての歯車が吹き飛ばされることになるのは、万人が「階級外の者」になるときのことである。要するに、プロレタリア階級が主体集団へと転じるとき、彼らが社会野全体に浸透させることになるはずの欲望は、「階級外」になるというもの、階級外性への生成変化^{ソシウズ}だということです。これが、『アンチ・オイディプス』の時点でドゥルーズ＝ガタリの展望していた「革命」です。

3. 『千のプラトー』(1980)：マイノリティ、承認闘争、マイノリティ性への生成変化

70年代後半に準備された『千のプラトー』で、「搾取され支配されている大衆」として同定されるのは、プロレタリアではもはやなく、マイノリティです。実践上の対立は、ブルジョワ/プロレタリアではなく、マジョリティ/マイノリティに新たに見出される。この変更は同時代の資本主義の発展状況を踏まえてのものです。『千のプラトー』では次のような情勢認識が示されます。「北＝南、中心＝周縁という軸が西＝東の軸よりも重要となり、基本的には前者が後者を決定する〔…〕。中心において西＝東の均衡が保たれるようになるにつれて〔…〕、北＝南の均衡は崩れて「不安定」となり、それが中心での均衡を不安定にする〔…〕。中心のただなかにも様々な南、様々な第三世界が見出される〔…〕。不安定化は〔…〕、資本主義の作動に

5) Id., *ibid.*, p. 417–418.

6) Id., *ibid.*, p. 303.

不可欠な公理、 $\dot{\text{不平等交換}}$ と呼ばれる公理から導かれる帰結である⁷⁾」。

レーニンの切断によって北に創り出された東西分裂を、資本主義は、社民的公理の追加によって安定させた。しかし、サミール・アミンなどの第三世界主義論に依拠してドゥルーズ＝ガタリがここで強調するのは、北での社民的公理のそうした追加には、それを補完する公理としての「不平等交換」の南への押し付けが必然的に伴うという点です。北での東西間の安定、ブルジョワジーとプロレタリアートとの階級協調は、不平等交換の南への移動、外化なしには実現されない。要するに、北でのマジョリティの形成が、南、及び、北における南の飛び地でのマイノリティの増殖を導くということです。

『千のプラトー』執筆期にドゥルーズ＝ガタリが目にしていたのは、実際、当時の社会学者たちが従来の労働闘争と区別して「新たな社会運動」と呼んでいた闘争、女性や移民、少数民族やLGBTなどによる権利闘争、承認闘争でした。マイノリティによる利害闘争としてのそうした承認闘争について、『千のプラトー』では、しかし、次のようにも言われます。「マイノリティの力能、特殊性の力能は、その普遍的形象あるいは普遍的意識をプロレタリアのうちに見出す⁸⁾」。要するに、マイノリティがその利害闘争を通じて求めることになるのは、普遍化可能な存在としてのプロレタリア階級のその下部集合となることで、プロレタリア階級とブルジョワ階級とから構成されたマジョリティのうちに自らも合流することだということです。しかし、ここでマイノリティもまた、プロレタリアがかつて直面したのと同じような壁に直面する。ひとつの集合がマジョリティのうちに新たにカウントされるときには、必ず、それに代わって別の集合が新たに搾取と支配の対象にされるということを、すべてのマイノリティは彼ら自身の経験を通じて知っているわけです。ドゥルーズ＝ガタリは次のようにも言っています。「一般に、マイノリティの立てる問題が統合や包摂によって解決されることはなく、公理、身分承認、自治権獲得、独立によっても解決されることはない⁹⁾」。たとえ、現状において搾取と支配の対象となっているすべてのマイノリティ集合が、マジョリティの下部集合としておのれを承認させることに成功したとしても、マジョリティ/マイノリティという配分それ自体が廃棄されることはけっしてなく、この配分をつねに新たな仕方で再生産し続ける資本主義公理系は手つかずのままに残されるということです。

承認闘争を通じて革命的服従集団となる諸々のマイノリティは、以上のような壁に直面することで、しかし、主体集団へと転じる可能性に開かれることになる。マイノリティの主体集団が出現した場合に彼らが社会野に浸透させることになる欲望は「マイノリティ性への生成変化」と呼ばれ、次のように説明されます。「ある意味では、生成変化の主体はつねに「人間（＝男性）」〔*homme*〕だと言える。ただし「人間」がそのような主体となるのは、何らかのマイノ

7) Id., *Mille Plateaux: Capitalisme et schizophrénie*, t. 2, Minuit, 1980, p. 584-585.

8) Id., *ibid.*, p. 589.

9) Id., *ibid.*, p. 589.

リティ性への生成変化に入り、自らのメジャーな^{アイデンティティ}同一性から引き剥がされる限りにおいてのことだ。〔…〕他方、ユダヤ人たち自身もユダヤ人になり、女性たち自身も女性になり〔…〕、黒人たち自身も黒人にならなければならないのは、マイノリティだけが生成変化を始動させる媒体となり得るからだが、〔…〕そうしたアクティヴな媒体となるためには、マイノリティもまた、マジョリティとの関係において規定される集合であることをやめなければならない。〔…〕ユダヤ人への生成変化や女性への生成変化では、二重の運動が同時に進行する。〔…〕女性性は女性へと生成変化しなければならないが、この生成変化は人間＝男性全体が女性へと生成変化するなかででなされなければならない¹⁰⁾」。

今日の日本における琉球人の闘争を例に考えると理解し易いかもしれません。琉球人の闘争は、まずは、在琉米軍基地撤廃を求める闘争としてあります。しかし、この第一の闘争のただなかで彼らは、第二の闘争を同時に進めることになる。琉球人は在琉米軍基地の撤廃を求めるが、しかし彼らは、琉球に代わって他の別の地域に新たな「沖縄」が作られ、そこに米軍基地が移されることも許さない。在琉米軍基地撤廃を求めることは、それ自体としては、マイノリティである状態から脱し、マジョリティに合流しようとするのだと言えますが、しかし、それと同時に新たな「沖縄」が作られることも許さないというのは、おのれが合流しようとする当のマジョリティがマジョリティにとどまることも許さないということです。マジョリティがマジョリティであるためには、どこかにマイノリティを作り出すことが必要不可欠なわけですが、琉球人たちはまさに、それを許さないと言っているわけです。彼らは、マジョリティとして存在する集合に合流しつつ、同時に、その集合全体をマジョリティではないものへと導くのであり、この運動をドゥルーズ＝ガタリは「マイノリティ性への生成変化」と呼んでいるのです。自分たちの押し付けられている不平等交換を撥ね退けつつ、同時に、自分たちに代わって別の人々が不平等交換を押し付けられることも拒否する——そのような闘争を開始するマイノリティが「媒体」となって、マジョリティに属する人々がマイノリティ性への生成変化に入るということに、『千のプラトー』の時点でのドゥルーズ＝ガタリは「革命」を展望していたのです。

4. 『哲学とは何か』(1991)：人間、人権（人道主義）、動物性への生成変化

社会主義体制崩壊期に準備された『哲学とは何か』を特徴づけるのは次の一文です。「貧困が〔…〕ゲットーから外に出てこようとするときに、いったいどの社会民主主義が発砲命令を下さなかったか¹¹⁾」。これは『アンチ・オイディプス』でも『千のプラトー』でもけっして言われなかったことです。発砲命令が下されようが下されなかろうが、搾取され支配されている

10) Id., *ibid.*, p. 357.

11) Id., *Qu'est-ce que la philosophie ?*, Minuit, 1991, p. 103.

限り、プロレタリアやマイノリティは自分たちの利害のために闘い続けるということが、『アンチ・オイディプス』と『千のプラトー』では議論の前提になっていた。『哲学とは何か』ではこの前提が捨てられるのです。

『哲学とは何か』でも、搾取され支配されている大衆として同定されているのはマイノリティです。しかし『千のプラトー』とは異なり、『哲学とは何か』では、マイノリティは、もはや、闘う存在とは看做されていません。『哲学とは何か』では、『アンチ・オイディプス』でも『千のプラトー』でも一度も用いられることのなかった語が導入されます。「犠牲者」という語です。マイノリティは、闘うことなく死にゆくだけの「犠牲者」だとされるのです。『千のプラトー』でドゥルーズ＝ガタリは、プロレタリア階級という形象のその普遍化可能性が、マイノリティの闘争を可能にする条件だとしていました。社会主義体制崩壊の下、新自由主義が全面化しつつあった時期に執筆された『哲学とは何か』では、しかし、マイノリティの闘争のためのそうした条件が完全に失われてしまったとの情勢認識が示され、この認識に基づいて議論が進められることになる。同書で新たに問われるのは、「犠牲者」に転じたマイノリティを眼前にして、マジョリティに属している人々、すなわち、「人間」である人々が何をなすべきかということです。

この観点から『哲学とは何か』で議論の俎上に載せられることになるのが、人道主義であり、人権の普遍性を説く言説としての所謂「政治哲学」です。『アンチ・オイディプス』がプロレタリア階級闘争時代の書、『千のプラトー』が「新たな社会運動」の時代の書だったとすれば、『哲学とは何か』は、人道活動 NGO と人権論とが台頭してきた時代の書だと言ってもいいでしょう。

『哲学とは何か』において人権は、たとえば、次のように論じられます。「何らかの普遍的なオピニオンを「コンセンサス」として形成することですべてのネーション、すべての国家、そして、市場に道徳的秩序を与え、友たちからなる社会を、あるいは、賢者たちからなる社会すらをも回復できると主張するコミュニケーション哲学には、相当の無邪気さ、さもなければ、相当のしたたかさが必要だろう。人権は、権利を有する人間の内在的存在様態について何も語らない¹²⁾」。マジョリティあるいは「階級」に属し、人権を享受している人々、そのことによってまさに「人間」である人々が、たんに「人間」でないだけにとどまらず、「人間」であることを勝ち取るための闘争のその可能性すらも奪われた状態、その意味で「動物」と呼んでいい状態に陥ったマイノリティを眼前にして、彼らにも人権が保証されなければならないと説く——そのような場面がここでは想定されています。動物状態にある犠牲者たちにも、「人間」であることへの権利としての「人権」を与えなければならないとするような「政治哲学」について、ドゥルーズ＝ガタリは、相当無邪気だ、さもなければ、相当したたかさだとして批判し

12) Id., *ibid.*, p. 103.

ています。そうした「政治哲学」の掲げる人権普遍主義は、人権を享受し「人間」として生きている者たちのその「内在的存在様態」を忘却することで初めて成り立つと、ドゥルーズ＝ガタリは言うわけです。

「人間」をその「内在的存在様態」において捉えるとは、「人間」を内在的体系としての資本主義公理系のなかで把握するということであり、具体的には、「人間」であることへの権利としての「人権」を、資本主義的公理のひとつとして捉えるということです。おのれの内的限界をつねに拡大することで発展してきた資本主義は、ブルジョワ/プロレタリアの配分から、マジョリティ/マイノリティの配分を経て、人間/動物の配分にまで至った。資本主義のこの最後の局面において、ある人々が「人間」として生きることが、別の人々が「動物」として遺棄されることなしにはあり得ません。人権普遍主義は、「人間」が存在するためのその条件として産み出されている当の「動物」に、「人間」であることへの権利を保証しようとする矛盾あるいは欺瞞に満ちた振る舞いなのであり、この意味でこそ、無邪気だ、さもなければ、したたかだと言われるのです。

『アンチ・オイディプス』で階級外性への生成変化として、『千のプラトー』でマイノリティ性への生成変化として提案されていたものに相当するのは、『哲学とは何か』では動物性への生成変化です。ドゥルーズ＝ガタリは次のように述べます。「私たちの責任で犠牲者たちがいるのではなく、私たちは犠牲者たちを眼前にして責任を負う。動物をなす […] こと以外に、下劣さから逃れるための手段はひとつもない。他ならぬ思考そのものが、ときとして、生きている人間（たとえそれが民主主義者であっても）よりも、死せる動物に近いのだ¹³⁾」。断末魔にある「動物」を眼前にして、「人間」は、人権の普遍性を説いたり、人道活動を行ったりすることから「政治」化し始めるかもしれないが、しかし「人間」は、ひとたび自分たち自身の内在的存在様態のその「下劣さ」を自覚するならば、その自覚、恥辱に押されて、動物性への生成変化に入るはずだ——ドゥルーズ＝ガタリが彼らの最後の共著で示した「革命」への展望はそのようなものでした。

5. 今日の「コミュニズムという幽霊」

『哲学とは何か』刊行から四半世紀以上が経った今日もなお、同書で展開された議論は有効なのか。所謂「ヨーロッパ移民危機¹⁴⁾」の最中、2015年9月に発表されたテキストで、フラ

13) Id., *ibid.*, p. 103.

14) シェンゲン空間内への非正規来入者数は、二〇〇九年から一三年まで年間一〇万人程度の規模で推移していたが、一四年には約二八万人と急増し、一五年には一八〇万人超を記録した（一六年は約五〇万人、一七年は約二〇万人）。一五年七月にはひと月で一〇万人を突破、八月には一九万人、九月には一七万人、一〇月には二〇万人超となった。一五年のこの「移民危機」は、一一年三月からのメ

ンス人哲学者エチエンヌ・バリバルは次のように論じています。「ヨーロッパで現在構築されつつあるのは、難民拒否の「各国ごとの「^{フロン・ナショナル}国民戦線」というよりもむしろ」^{フロン・トランスナショナル}諸国民横断戦線である。公然と人種差別的で暴力的なグループが幾つか存在しているが、そうしたグループはこの戦線の極点をなしているに過ぎず、この戦線全体は、功利主義（「我々のところにはもうスペースがない」）から、アイデンティティ・イデオロギー（キリスト教的としている国も、無宗教的としている国もあるが、いずれにせよ、「ヨーロッパのその本性がイスラーム教徒の殺到によって脅かされる」）を経て、安全保障問題（「難民にはジハード主義者が紛れ込んでいる」）に至るまで多岐にわたる議論で構成されている。おそらく我々は今日、競争やナショナリズムなどのためにこれまでは一度も実現され得なかった事態に、史上初めて居合わせつつあるのだ。反難民そして反移民の旗印の下に統一されたひとつの排外主義的な「党」がヨーロッパに出現するという事態である。その当然の結果として、逆に、連帯のヨーロッパは、新たな同盟に基づいて規定されるひとつの確固たる政治闘争なしには、けっして構築され得ないということになる。移民に対する暴力を断固として糾弾することから開始され、移民受け入れの環境を要求することへと継続される政治闘争だ¹⁵⁾」。

ここで「連帯のヨーロッパ」として描かれているのは、動物性への生成変化ではまるでありません。難民は、闘うことなく死んでゆくだけの「犠牲者」などでは微塵もない。すべてに先立って、難民たちによる闘争、彼らの物理的かつ政治的な運動がある。ここでは、ヨーロッパの「壁」、北の防御壁を押し倒して南からなだれ込む人々のその圧倒的な運動が、ヨーロッパ人たちを難民への生成変化へと導く「アクティヴな媒体」として実体的に同定されています。バリバルは、「コミュニズムという幽霊」が難民たちとともに南から北に到来するのを見ているのであり、『千のプラトー』で示された路線が改めてその有効性をもつ時代に今日我々が入りつつあると考えているのです。■

ㄨ内戦を逃れて近隣諸国（ヨルダン、レバノン、トルコ、イラクなど）に避難していたシリア人たちの多くが地中海を渡って主としてギリシャ（エーゲ海諸島）に上陸したことに由来する。

15) Étienne Balibar, « Europe et réfugiés: l'élargissement », le 15 septembre 2015, *Mediapart*, repris dans id., *Europe: crise et fin ?* (Le Bord de l'eau, 2016).